

はじめに

・城下町形成前の「よなこ」「しらかた」「ひらた」の「町」、「馬かた」でとられる「関」

天正3年(1575)6月(「島津家久上京日記」)

一廿一日打立、未刻に文光坊といへるに立寄、やすらひ、鯉而大仙へ参、其より行て緒高といへる城有、其町を打過、
よなことといへる町に着、豫三郎といへるものゝ所ニ宿、
一廿二日明かたに船いたし行に、出雲の内馬かたといへる村にて関とられ行に、枕木山とて弁慶の住し所有、其下に大
こん島とて有、猶行てしらかたといへる町に舟着、小三郎といへるものゝ所ニ立よりめしたへ、亦舟揖し行に、右ニ
檜木の瀬とて城有、其より水海の末に蓮一町ばかり咲乱たる中をさながら御法の舟にやとおほえ、漕通、平田といへ
る町に着、九郎左衛門といへる者の所に宿、拾郎三郎よりうり、亦玄蕃允より酒あつかり候、

→「関」とは何か? = 関銭・関料=通行税

享禄3年(1530)「平浜別宮」の神田等の中に「六貫文者、上分銭、馬形」(毛利家文庫諸臣証文・多胡家)

永禄7年(1564)「平浜別宮」領の中に「八幡庄三百貫 馬形_{上分共三}」(譜録・野村作兵衛正道)

→「上分銭」「上分」 →「熊野上分米」「那智山海上上分」「日吉上分」「越後弥彦社寺泊津之御上分」

※「上分」=「初穂」=「関」(相田二郎・勝俣鎮夫・網野善彦)

→守護や平浜八幡宮と関係を取り結び、この水域に活動の基盤を持つ、水上勢力がいたのではないか

・上分徴集は流通の障害なのか否か なぜ家久は馬形を通ったのか

年6貫文 = 閏月でなければ月500文 ⇨大の月で1日17文(1日銅銭17枚の収入)

→頻繁で活発な日常的な水上交通を前提として理解すべきものではないか?

I 内海の諸港湾

(1) 古代・中世の内水面交通

※「内水面交通」(坂井秀弥氏)=海上よりも安全、操船技術が容易、船の構造・装備や港の設備が簡単、平野部では河川の遡上も容易

①風土記時代の内水面交通の結節点

森田喜久男氏「古代出雲における水上交通の展開」(『日本古代の王権と山野河海』2008)

=「北ツ海」と称された日本海においては、潟湖が港湾施設として重要な役割を果たした

「潮」=「佐太水海」～「入海」、「神門水海」～「大海」を結ぶ水門

「津」=秋鹿郡「大野津社」 「渡」=「朝酌渡」「促戸渡」

その他=「玉作街」、西谷墳墓群・神原神社古墳、朝酌川遺跡群(古墳時代前期の護岸・杭列)、青木遺跡

②中世内海の港 船着場の実態は不明であるが、小規模船舶を前提に考えるならば着岸は容易

「佐陀江(満願寺江)」「赤江」「長江」「津田」「大野浦」「安来津」

「八幡津」「今津」「寺津」「川津」「薦津」

→港湾地名がないものも、湖に面した荘園には、港湾機能が付随した可能性が高い

長講堂領「長海荘」(戦国期には隠岐氏の所領あり) 港があったことは確実と言える

=「港町」というよりは、アクセス自在な群小港湾が乱立し、消長を繰り返していたものか

(2) 大橋川河口地域の港湾群 八幡津・馬形・アタカイノ津・揖屋浦

①立地

懐の深い湾の中央部に、2本の川(大橋川・意宇川)の河口

湾とその奥に伸びる平野部 = 古代「淤宇宿禰」一族の根拠地、律令制下の国府地域

②中世「府中」地域の展開

・出雲国国衙領の中核部分ともいえる 大草郷・大庭保・山代郷・竹矢郷・出雲郷

- ・井上寛司「中世杵築大社々領支配の構造と特質」（『大社町史研究紀要4』1989）
 - 〈1〉惣社・伊弉諾・伊弉冉社などの神田が、国府周辺の大草・山代・竹矢・出雲の四郷に集中的に存在
 - 〈2〉1230年頃の平浜別宮が、国衙の要請で、国衙在庁官人も参加して四季仁王大般若経転読
 - ＝平浜別宮もまた広義の国衙支配機構の一環を構成
 - 〈3〉康永4（1345）竹矢郷内の円通寺が出雲国安国寺に指定されたこと
 - かつての国府地域を含む意宇平野部一帯が新しく出雲府中の領域として定められていたのではないか
- ・南北朝期 幕府方の守護所
 - 康永4年（1345）円通寺が出雲国安国寺に指定される
- ・永正11年（1514）平浜八幡宮 往古より出雲・隠岐2ヶ国「反別」で造営すると記される
 - ＝平浜八幡宮は、反別を賦課できる国衙や守護が造営責任を持つ、国レベルの神社
 - 中世においても、出雲国全体にとって特別な場所

③港湾群の基本的性格

- ・平浜八幡宮社役5ヶ寺、安国寺など寺々の麓が、海から見ると、馬形の丘陵上に列立する壮観
 - ＝都市的な性格を持つ場として機能していたことを示すもの
 - ・湾内や川にはたくさんの「津」が存在
 - ＝多数の船着場が併存・共存する中世内海水運
 - 「八幡津」「馬形」（「ウマカタノ津」）「アタカイノ津」「姫津」
 - ・八幡荘は、大井村・福富・馬形・八幡津・八幡市場を含む
 - ＝二つの河口とその周辺の湾内海岸線を占める 海と港の荘園
- ◆14c 観応の擾乱、15c 応仁文明の乱、16c 大内義隆の侵攻
- ＝いずれも大橋川、中でも河口部を押さえることが戦況を大きく左右

II 中世日本海水運の展開

（1）古代からの遠隔地交流

- ・旧石器時代（後期）西山陰＝瑪瑙・玉髓・黒曜石製の台形様石器・ナイフ
 - 隠岐とは陸続き
 - 東北日本招来の湧別技法による瑪瑙製船底状石核・剥片（玉湯町・正源寺遺跡）
- ・縄文早期末～前期初め 島根大学構内遺跡（丸木船・櫂） 轟B式＝北部九州～山陰
- ・『出雲国風土記』神門郡古志郷

いざなみのみこと 伊弉弥命の時、ひふち 日淵川を以て、つゝく 池を築造りたまひき。そ の時、こし 古志の国人等 たちき たりて、つつみ つく 堤 を為りて、やが や ど 即て宿居れりし所なり。故、古志と云ふ。

（2）中世西日本海水運の成立

- ・井上寛司「中世西日本海地域の水運と交流」（『海と列島文化2 日本海と出雲世界』1991年）
 - 11～12c 荘園公領制の成立に対応して、体制的な基幹的交通手段としての地位を獲得
 - 美保関に海関が設置され「美保関」の名称が成立したのは、中世西日本海水運と時期を同じくするもの
- ・13～14世紀の西日本海
 - 正治2年（1200）2月5日条「石見唐船」（『玉葉』）
 - 宝治2年（1248）12月日藏人所牒写（「真継家文書」）は、美保関（「三尾」の「関」）の史料的初見
 - 元弘3年（1333）後醍醐天皇が追手隠岐清高の船団を「つくし舟か商人舟か」（『太平記』）と見惑う。
 - 貞治5年（1366）、倭寇禁圧を求めるため高麗使節金竜が出雲国杵築に着岸
 - 杵築大社三月会「相撲頭神物」に「毘布十卷」（「千家家文書」『大社町史』1046）

（3）15世紀の日本海水運 転換期としての14世紀

①15世紀における広域的交流

- ・応永15年（1408）6月、若狭国小浜に「南蕃船」が着岸（「若狭国税所今富名領主代々次第」）
- ・寛正6年（1465）当時、宗氏の若狭国小浜代官の伊賀次郎左衛門尉（『親元日記』同年七月十三日条）

成宗 7 年（1476）の壱岐「三甫郎太郎」の発言「もし壱岐から北海を渡れば、順風ならば八日で若狭州に至る（中略）博多・壱岐の商人がこのルートを往来している」（『成宗実録』巻 69）

②15 世紀における西日本海西部

応永 15 年（1408）、被虜朝鮮人送還を求めた朝鮮通信副使が石見国に漂着（『世宗実録』巻 42）

応永 27 年（1420）、出雲国安来には、すでに七十余戸もの朝鮮人町（『世宗実録』巻 7）

1426～1502 年、周布氏名義の通交が計 49 回（『朝鮮王朝実録』『海東諸国紀』）

寛正 5 年（1464）、「雲州海賊」が明に侵入して小児を略奪（『臥雲日件録抜尤』）

応仁元年（1467）～文明 2 年（1470）の遣使記事（『海東諸国紀』）

美保関郷左衛門大夫藤原朝臣盛政 見尾関処松田備前太守藤原朝臣公順 出雲州留関海賊大将藤原朝臣義忠

成宗 21 年（1490）、対馬宗貞国が賊徒の根拠地が出雲・石見に及ぶと認識（『成宗実録』巻 247）

※16 世紀の石見国温泉津に「せんさきや又衛門」「肥中屋孫二郎」の屋敷

③15 世紀における西日本海東部

文明 2 年（1470）4 月 26 日 出雲国守護京極持清から守護代尼子清貞に宛て（「佐々木文書」）

「隠州所々廻船美保関役の事、その沙汰を致さざる舟に至りては、先々のごとく若州小浜において懸沙汰あるべく候」

永正 3 年（1506）11 月 伯耆商人の国屋又四郎と京都商人掃部との商取引で若狭小浜の商人絹屋主計が割符を組む（「蜷川家文書」388）

⇒西日本海の西部海域・東部海域それぞれにおける様々な交流の断片

◎15 世紀以前の西日本海には、重層的で複雑な構造をもつ様々な海路が存在 それは時期により変化

15 世紀は、日常的な交流・物流が広域化していく時期 日本海水運の新たな段階

準構造船から構造船への技術的進展 港湾機能の拡充された港湾都市のひろがり

Ⅲ 内海港湾の変容と東アジア

（1）港町の形成と発展 14c 末～15c 安来津の発展と白潟の形成

16c 平田・米子・末次の町としての形成・発展

①安来津の発展 中世～近代初頭の山陰地域を代表する港湾都市

元弘 2 年（1332） 隠岐へ流された後醍醐天皇が安来から出帆（『増鏡』）

正平 9 年（1354） 足利直冬が軍事拠点として滞在（「北島家文書」）

応永 7 年（1400）か 松源寺（曹洞宗） 「阿轍和尚の開山」（『雲陽誌』）

同軌阿轍は、太源宗眞（峨山紹碩の弟子）の法流に連なる禅僧

1420 年 朝鮮人 70 余戸が存在か（『朝鮮王朝実録』）

1560 年代 「安来町」（「坪内家文書」）

②町としての白潟の形成

・白潟付近の古地形＝床几山の麓付近から北に向けて伸びる細長い砂州、東側は未詳ながら低湿地が大半

・立地＝ 宍道湖と中海を結ぶ水上の要衝であるとともに、意宇郡と島根郡を橋によって結ぶ陸路の要衝

観応元年＝貞和 6 年（1350）8/13 白潟橋合戦（「小野家文書」・『萩藩閥閥録』66）

＝「白潟橋」が 14c 半に存在、14c 末「大山寺縁起絵巻」の橋

・売布神社 『出雲国風土記』売布社・『延喜式』売布神社・白潟大明神・橋姫大明神

・中世白潟の寺院 ＝堀尾絵図「松江城下町絵図」（1620～1633 頃）の寺社配置と創建伝承

宗泉寺 明德元年（1390）松浦熊太郎が開創

その末裔の松浦貞房が文安 2 年（1445）現在地に再建、開山は趙天仲諡（『松江市誌』『雲陽誌』）

伯耆国退休寺末寺、伯耆国光徳寺二世の趙天仲諡は、退休寺開山の源翁心昭の法流

常栄寺 応永年中（1394～1428）成立の草庵**理光庵**を、永禄 13 年（1570）に毛利元就が嫡男隆元（法名常栄）の菩提を弔うため修造して常栄寺と改号したと伝えられる曹洞宗寺院

永禄 13 年 7/22 毛利元就袖判奉行人連署書状写（『出雲鉦』）＝「白潟**理光院**」宛

安栖院 応永年間（1394～1428）湯原氏が再興して寺号を**梅林庵**から安栖院へ改称したとも伝える

趙天仲諡による開山と伝えられる曹洞宗寺院（『松江市誌』）。

龍昌寺 「松江城下町絵図」には**龍吟庵**、文正元年（1466）創建

角新七が閑居して龍吟庵と称し、後に趙天仲諡を開山として伽藍造立（『松江市誌』）。

龍覚寺 応永年中（1394～1428）青砥義清が開く もとは栄町付近の真言宗寺院

無余空円（光徳寺初代）を開山として曹洞宗に改宗（『松江市誌』）。

全龍寺（全隆寺） 伯耆国光徳寺末寺で寛永年間（1624～1644）まで**龍蔵庵**と称すと伝える（『出雲鋏』）。

開基は青砥氏（『雲陽誌』）、橋姫大明神に隣接する場所に位置

永禄 13 年 6 月 三沢氏が「白潟之内**龍草庵**」を晋叟寺へ進上（「晋叟寺文書」）

＝中世後期に広く地域社会へ展開した曹洞宗諸派の中でも、中世の白潟周辺は、伯耆国退休寺・光徳寺からの教線が色濃く及んだ源翁派の一拠点であったと推測される

・港町白潟の形成

明応 4 年（1495）松浦道念寄進状（「売布神社文書」）

「両目代、又にし・ひがしおとな中」

→遅くとも 15c 末には、東西二つの町場が存在

目代 2 名と「おとな中」が支配と在地秩序の中心規模の大きな町場であったことが窺われる。

・白潟住人の動向と性格

15c 末の「おとな中」

寄進者「道念」＝白潟の松浦氏

＝寄進のために何度も土地を買える財力を持つ

永禄 6 年（1563）10 月 毛利氏が河村又三郎を

「白潟末次中町」の「磨師・塗師・鞆師・銀細工（つかさ）」に任じる（『萩藩閥閥録』巻 98）

永禄 13 年 2 月 「白潟衆」が尼子勝久方として合戦に及び、

毛利氏が残す所なく放火（「毛利家文書」791）

⇒白潟と京極氏・尼子氏との結び付きの強さ ＋ 「衆」として軍事行動をとりうる基盤の存在

◆1562～66 毛利氏の侵攻、1569～1571 尼子氏再興戦

山陰全体に大きな影響を及ぼす戦争において、攻防の焦点が、八幡津・馬形よりも、

白潟・末次方面に移っている

（2）内海の水上市力

①「白潟衆」（「おとな中」・松浦氏）

②松浦氏 尼子氏家臣「富田衆」

松浦道念寄進状

（白潟）方御はしひめきしん申下地之事
合六百文しり 在所へ一所か□ミ
所なへかた一所にしの原
右彼下地へ、代物十四俵ニ永代かい申候て、
（寄進）きしん申候、かやうニ仕候上者、我々かしそ
ん悉はんしやうニ御まほりあるへく候、若公
方事、又わたくし事、何事にても候へ、う
りけん（亮券）のむねニまかせて、両目代、又にし・
ひがしおとな中より、御はたらき候て、末代
御きしんあるへく候、仍永代きしん状如件、
明応四年正月八日
道念（花押）

尼子勝久宛行状（モト折紙カ）

今度「
手相動時、及合戦被疵、忠儀神妙
候、就其、宛行知事、
一 隠岐井後西東拾八貫前事、
一 伯州奈木良内十四石前事、
一 五人乗之船、於分国中無役事、
一 忌部名職百姓地事、
一 老町田名・中村名・下名・大か
はた名半名事、
右、何も全可相抱候、於相支者、以
他足、可申付候、名職事者、如先年、
勤役等無抜目、遣者也、謹言、
十月十九日 勝久（花押）
松浦小太郎殿

尼子勝久書状（切紙）

伯州八橋郡之内野津三百石代官職申
付候、公用等、全取沙汰肝要候、恐
々謹言、
霜月廿日 勝久（花押）
松浦小太郎殿

霜月 20 日尼子勝久書状（「松浦文書」）・10 月 19 日尼子勝久宛行状（「松浦文書」）

これらの権益が実質的な意味を保持しえたとは考えがたいが、松浦氏の実像を知る手がかりとして重要

- ・従前からの忌部名職・百姓地
- ・伯耆国「野津」（琴浦町筧津）代官職
- ・伯耆国「奈木良」（米子市奈喜良）14 石
- ・隠岐国「井後」（隠岐の島町伊後）18 貫
- ・「五人乗之船」無役通行権
- ・「原手」における合戦 ＝松浦氏の水上市力としての性格を裏づけるもの

＝元亀元年（1570）10/14 尼子氏方が高瀬城から平田へ合戦を仕掛け、死傷者多数（「岡家文書」）

＝舟手衆による湖上を経由した攻城戦 松浦氏は平田の手崎城へ攻め込んだ尼子氏方の一人

⇒以上のような、尼子勝久方としての動向は、永禄 13 年「白潟衆」の動向とも重なる

③湯原氏 白湯安栖院の再興伝承 尼子氏家臣「富田衆」 佐陀・安来などに拠点
尼子氏の美保関代官・林木荘代官 毛利氏時代の満願寺城主

④多胡氏

享祿3年(1530) 馬形上分銭の納入などを請け負う

天文12年(1543) 尼子晴久袖判多胡久盛知行注文写(毛利家文庫諸臣証文多胡家)

＝商人・職人統制(意宇郡紺役・揖屋相物役・八幡市場等塩役)を担える存在 北浦や矢田村に權益

＝土地權益に依拠した領主ではない 水上勢力としての側面を推測させる存在

尼子晴久袖判多胡久盛知行注文写
(花押写)
乃木之内(意宇郡) 御代官
島根之内(意宇郡) 御給所
西長田(意宇郡) 御給所
岩坂之内(意宇郡) 御給所
太郎丸(意宇郡) 人夫御免 御給所
兄弟三人抱分 今度あらため計候事、
(島根郡) 北浦之内江淵名 永代従湯殿美濃守買得
(意宇郡) 意宇郡紺役一円 従大殿様御判アリ
(意宇郡) 矢田村名 又散田分
春林分 米原新五兵衛所ヨリ年記
(意宇郡) 揖屋相物役銭之事
塩役銭之事(意宇郡) 八幡市場モ同前也、
大願寺 買得
以上、
天文十二年七月廿三日 多胡次郎右衛門尉 久盛

毛利元就袖判平浜別宮領書立写
元就公ノ
平浜別宮領書立
此外海上相計さかへ在之
一八幡庄三百貫 馬形上分共ニ 此入不分明
但近年者此内六十貫前知行
一竹矢郷内
但近年者此内八町知行
一廿三町三百歩 阿陀加江内
一壺町 山城之内
一壺町 長田之内
一壺町 朝酌内
一本庄之内 やわた田
一壺町 湯郷
一壺町五段 朝酌内 此入不分明
于時永祿七年きのへねのとし八月十日

⑤平浜八幡宮 永祿7年(1564)8月10日毛利元就袖判平浜別宮領書立写(譜録・野村作兵衛正道)
八幡荘(馬形上分共)、竹矢郷・阿陀加江・山代郷・長田郷・朝酌郷・本庄・湯郷の内
＝社領が内海の拠点を中心に展開 内海を基盤とする存在

(3) 石見産銀の輸出と港湾都市の発達 転換期としての16世紀半ば

①「唐船」「北国船」の着岸

永祿3年(1560)頃～ 宇龍浦など島根半島周辺に「北国船」「唐船」の着岸(「日御碕神社文書」)

天文20年(1551)越前国三国湊に明船が着岸(「朝倉始末記」『改定史籍集覧』第六冊)

永祿12年(1569)石見国浜田に「唐船」が着岸(「森脇覚書」『中国史料集』)

天正3年(1575)石見国温泉津・浜田に鹿兒島・坊・泊・秋目・京泊・白羽・東郷など「船衆」「町衆」
が滞在(「島津家久上京日記」)

天正15年(1587)長門国小畑に「唐船」が着岸(「九州道の記」『群書類従』三三八)

②明の日本研究書 『日本図纂』(1561)の地名 →形は行基図 地名は独自の表音表記

伯耆国の「他奴賀知(田内カ)」「倭子介(大塚)」「阿家殺記(赤碕)」

出雲国の「密和俣失記(美保関)」「也生忌(安来)」「失喇哈叮(白湯)」「非喇叮(平田)」
「戸流(宇龍)」「欽子溪(杵築)」

石見国の「番你(波根)」「山子介(刺賀)」「有俣子(温泉津)」「哥(江津)」
「撮俣市(都野津)」「番馬塔(浜田)」「南高番馬(長浜)」

→中国地方まで、多くの地名が記されている。しかも港ばかり。

16世紀後半の日本列島は港湾都市全盛の時代 安来・白湯・平田もその中に位置づけられる

おわりに

・内水面の日常的物流・交流も、日本海を介した広域的交流も、古代から連綿

・松江地域をめぐる中世水運 3つの画期

①美保関に象徴される中世西日本海水運の形成

②14～15世紀の間に、日常的物流・交流の広域化 造船技術・港湾設備の進展 港町の形成と発展

③16世紀半ば、東アジア海域の変化に連動した日常的物流・交流のさらなる広域化 港町の発展

・城下町がなぜ松江に作られたのか

城下町集住による大規模な人口を支えるために、相応の町の規模が求められ、消費物資を集中できる物流・交通の要衝が選ばれた（松尾寿『城下町松江の誕生と町のしくみ』2008年）。その際に、市場機能・港湾機能・手工業者居住地を併せ持つ、末次・白潟という町場がすでに存在したことが、城下町形成の要因であったことも、これまでに指摘されてきた通りである（山根正明『堀尾吉晴一松江城への道』2009年）。それは同時に、すでに存在した商業・物流の要衝に大幅な改変を加えて、自らの統制下に組み込むことが、領国経済を管理・統制しようとする際に、最も効果的と認識されたことを窺わせており、それだけ白潟周辺の経済的重要性が高かったことを示している。外海・内海を介した物流を管理し、商人居住区を限定し商人を把握するとともに、惣構を徹底した武家居住地の要塞化、陸路を軸とした強固な軍事防御体制の構築、大規模な掘削・埋立事業によって、全く新しい町を創り出したものと考えられる。

しかし、そのような堀尾氏の認識や判断は、15・16世紀の内海における拠点港湾都市の形成・発展がなければ、おそらく生み出されなかった可能性が高い。内海の諸港湾は、古代から連綿と続く内水面交通の豊かな日常的展開を基盤とするがゆえに、14c末～15c、16c半ばにおける大きな水運・海上交通の変化（日常的交流の広域化）の影響を深く色濃く受けた可能性が高い。拠点港湾都市の形成・発展は、その結果ではないかと推測される。

